

【パネルディスカッション】

「社会系教科教育授業実践の持続的研究とその基盤構築」の内容と意義

中 村 哲  
(関西学院大学)

1 パネルディスカッションの概要と趣旨

本パネルディスカッションは、「社会系教科教育授業実践の持続的研究とその基盤構築」のテーマで、兵庫教育大学において開催された社会系教科教育学会第23回研究発表大会(2012年2月18日～19日)の企画として2月18日(13:30～16:00)に次の趣旨で実施された。

社会系教科教育学会は、「学校教育における児童・生徒の社会的資質形成に関する教育実践の科学研究を行い、その普及と発展に寄与すること」を目的として、平成元年の11月26日に設立された。そして、本学会が平成19年度に設立20年を迎え、これまでの本学会の活動と研究成果を踏まえて、これからの新たな発展を生み出す試みを『社会系教科教育研究のアプローチ～授業実践のフロムとフォー～』(学事出版社 平成22年2月)として刊行した。本書においてこれまでの社会系教科教育学会としての授業実践を研究するアプローチが検討され、社会系教科教育の授業実践を持続的に研究する基盤構築が提案されている。

第1点としては、教師の教育行為である授業実践を社会の文化価値として評価する社会基盤を構築することである。第2点としては、授業実践を記録し、保存し、社会の共有財産として活用できるシステムを構築することである。第3点としては、教科教育学、教育学、教育工学など学校教育に関連する研究の蓄積、発信、交流等により学習指導要領に基づく教育課程の改革と撤廃を図ることである。

これらの観点は、授業実践の持続的研究としての研究理念、研究環境、研究目的に関する基盤であるが、通常社会系教科教育授業実践の諸研究において考慮されることは稀有である。その理由

としては、次のように指摘できる。①授業実践の研究対象に直接的に関係しないこと。②授業実践の研究手法が個人および団体に限定されない一般的な性格になること。③授業実践の研究成果としての社会的意義を確証しにくいこと。しかし、これまでの授業実践に関する研究の変革や創出を図る場合には、これらの観点を視野に社会系教科教育授業実践に関する新たな研究方法の開示が求められる。

本パネルディスカッションでは、これからの本学会の中核を担われる新世代の研究者の方々に、社会系教科教育授業実践の持続的研究を推進させていく研究事例を提示していただき、授業実践研究の新視点と課題を検討したい。

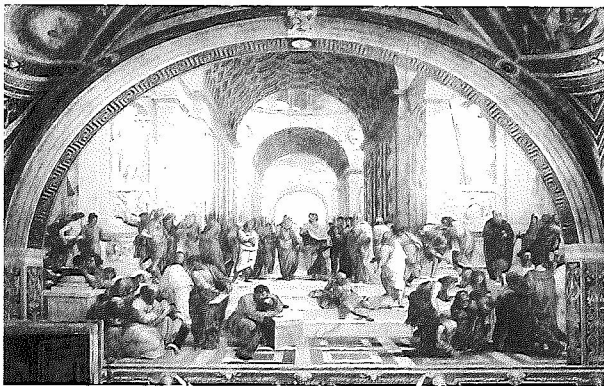
本パネルディスカッションの進行としては、原田智仁氏の司会により趣旨説明がなされ、基調提案を中村哲が行った。その後、馬野範雄氏、米田豊氏、關浩和氏が発表され、参加者も含めた質疑がなされた。

2 パネルディスカッションの内容

(1) 基調提案の内容

パネルディスカッションの基調提案としては、「社会系教科教育授業実践の持続的研究とその基盤構築—3冊の編著をてがかりに—」という題目で中村が行った。この提案は、中村が関与した3冊の編著をてがかりに社会系教科教育授業実践研究の性格とその研究基盤に関連する研究者としての資質および社会的研究体制の課題を指摘した内容となっている。

この提案内容の鍵になるのが、ルネッサンス時代の代表的画家ラファエロ(1483-1520)の絵画「アテネの学堂」である。これは、56人の古代ギ



ラファエロ「アテネの学堂」(ヴァチカン美術館)

リシャの哲学者たちの群像を通して西欧社会の思想・科学・技術などを含む西欧文化の様相が象徴されているルネサンス期の最高傑作である。そして、群像の中心となるのが中央に位置づくプラトンとアリストテレスである。プラトンは左手で著書『ティマイオス』を抱え、右手を挙げて人差し指を天に向けている。アリストテレスは左手で著書『エチカ』を持ち、右手を拡げて地に向けている。このように描かれている両哲学者の姿に彼らの哲学観が具現化されている。プラトンは事物の本質を超越的イデアとして把握するのに対して、アリストテレスは事物の本質を内在的エンテレケイアとして把握する。そして、この両者の哲学観は、プラトンが理想主義・理想主義と称される観念論、アリストテレスが内在主義・現実主義と称される実在論として西洋文化の思想的基盤になっている。このような両者の思想的基盤と関連づけて教育研究の性格を類別すると「思弁的研究と科学的研究」「理論研究と実践研究」「演繹的研究と帰納的研究」などと把握できる。

本基調提案においては社会系教科教育授業実践を対象とする社会系教科教育研究の性格をプラトンの理論研究とアリストテレスの実践研究として類別し、これらの研究的性格から中村が関与した3冊の研究書を手がかりに社会系教科教育授業実践研究の性格とその研究基盤に関連する研究者としての資質および社会的研究体制の課題を指摘している。取り上げた書籍は、次の3冊である。

『社会系教科教育研究のアプローチ～授業実践の  
 フロムとフォー～』(学事出版社 平成22年2月)  
 『社会科授業実践の規則性に関する研究―授業実

践からの教育改革―』(清水書院 平成3年2月)  
 『社会科授業実践に関する体系枠の構築と事例研究―知識獲得課程の視点に基づいて―』(風間書  
 房平成8年3月)

① 『社会系教科教育研究のアプローチ～授業実践の  
 フロムとフォー～』の研究的性格

本書は、本学会の設立20周年を記念し、これまでの本学会の活動と研究成果を踏まえて、これからの新たな研究発展を生み出す試みとして刊行されたものである。本書の内容は、次のように構成されている。

- 第1部 社会系教科教育研究のアプローチの基盤
- 第2部 社会系教科教育授業実践のフロムの理論化
  - 1 小学校生活科授業実践からの理論化
  - 2 小学校中学年社会科授業実践からの理論化
  - 3 小学校高学年社会科授業実践からの理論化
  - 4 中学校社会科地理授業実践からの理論化
  - 5 中学校社会科歴史授業実践からの理論化
  - 6 中学校社会科公民授業実践からの理論化
  - 7 高校地歴科地理授業実践からの理論化
  - 8 高校地歴科歴史授業実践からの理論化
  - 9 高校公民科公民授業実践からの理論化
- 第3部 社会系教科教育授業理論のフォーの実践化
  - 1 社会系教科教育授業理論構築のための授業開発
  - 2 社会系教科教育授業理論構築のための授業開発の意義

このような本書の社会系教科教育研究の基軸は、書名の副題に明示されているように授業実践のフロム(アリストテレス的思想)と授業実践のフォー(プラトンの思想)にある。本書の研究的性格は、次の刊行趣旨において指摘されている。

「この刊行の趣旨は、本学会の基本的性格と役割を踏まえて学校教育における日々の授業実践を根拠づける科学的研究の知見を開示するところにある。その理由は、授業実践の科学化を使命とする教科教育学の理論研究と学校における日々の授業実践との間には深く暗い溝が存在しているからである。そのために、本書の内容は、授業実践に関する教科教育研究のアプローチとして、事実としての授業実践からその授業実践に内在してい

る理論を解明する方法（「フロムの理論化」と称す。）と解明した理論を検証するために授業実践の事実を開発する方法（「フォーの実践化」と称す。）に基づく研究成果を核にしている。前者の「フロムの理論化」では、提案授業の単元計画、本時の計画と実践を分析対象として授業実践に内在する理論が各執筆者の研究方法によって解明されている。後者の「フォーの実践化」では、授業開発の視点（授業理論の仮設）を踏まえたモデルとして単元計画と授業計画が開発されている。さらに、それらの開発案が研究的に意義づけられている。<sup>1)</sup>

このような研究的性格から伺い知れるように学会員としての研究者と実践者が共同して授業事実を踏まえて教科教育学の課題である授業理論と授業実践の結合に対して研究的架け橋を試みているところに研究的意義が指摘できる。さらに、「社会系教科教育研究の傾向と基盤—授業実践を根拠づける持続的研究とその基盤構築—」として、本学会の研究誌に掲載されている研究論文238本の研究的傾向の特性と今後の研究的課題が指摘されている。その意味では、社会系教科教育授業実践の持続的研究を図る上で、これまでの研究成果を踏まえながらこれからの研究的課題が明示されていると言える。

## ② 『社会科授業実践の規則性に関する研究—授業実践からの教育改革—』の研究的性格

本書は、中村が昭和50年4月に秋田大学に就職し、そして昭和60年4月に兵庫教育大学へ転勤後5年ほど経過した時に出版したものである。その意味では、社会科教育学の研究者として取り組んできた初期の研究成果をまとめたものである。本書の内容は、次の8章から構成されている。

第Ⅰ章 授業実践からの教育改革の模索

第Ⅱ章 社会科授業実践に関する規則性とその類型

第Ⅲ章 行為理解の規則性に基づく社会科授業実践

第Ⅳ章 問題解決の規則性に基づく社会科授業実践

第Ⅴ章 系統的知識の規則性に基づく社会科授業実践

第Ⅵ章 課題解決の規則性に基づく社会科授業実践

第Ⅶ章 科学的探求の規則性に基づく社会科授業実践

## 第Ⅷ章 教材・教具（教授メディア）の規則性に基づく社会科授業実践

このような本書の社会系教科教育研究の基軸は、授業実践のフロム（アリストテレス的思想）にある。本書の研究的性格は、次のように指摘される。

研究対象としては、社会科の授業実践における教授＝学習過程に焦点づけている。さらに、その教授＝学習過程における中核的役割を担う教材・教具（教授メディア）も取り上げている。そして、教授＝学習過程については構成内容と展開方法、教材・教具（教授メディア）については構成方法と活用方法の規則性を解明している。研究方法としては、あるべき社会科授業を提唱するのではなく、事実としての社会科授業実践の規則性を解明する授業実践のフロム的研究（目的的授業研究）になっている。さらに、社会科授業実践としての規則性をその授業実践の基盤になる教科課程と教科目標と関連づける研究方法がとられている。

本書については恩師の森分孝治先生から次の書評をいただいたのである。「本書は20年近くにわたって渾身の力を込めて取り組まれてきた研究の成果を世に問おうとされている労作で、アカデミックで大部な研究書である。しかし、その内容は取っ付きにくい書名に反して、極めて実践的なものとなっている。」「本書の特長は、①すでにこれまで何人かの研究者によって吟味されてきた各立場の社会科教育について、改めて授業実践記録の綿密な分析から粘り強く理論を抽出し、理論の実際的結果を検討されていること。②新たに、社会科授業における教材・教具の組織的活用に関する規則性を明らかにされたこと。③分析・検討の内容をこの書物だけで批判検討可能にする努力をされていることにある。」<sup>2)</sup>

恩師からの書評は、学部時代に文学部にて中国哲学を学んでいた私が縁あって教育研究科に入学し、教科教育研究の性格も理解できない状況から何とか研究者として船出をした新造船となる研究書でもあった。

さらに、大学院時代に伊東亮三先生が授業中に指摘された教科教育学研究者のアイデンティティーを保持する次のスタンス（間隔）が、研究者の資

質として自覚された。

- ・行政的側面からのスタンス。学習指導要領に基づく社会科教育に追従するのではなく、その批判的吟味を行うスタンス。

- ・商業的側面からのスタンス。教育産業などの企業の利潤追求に利用されないスタンス。

- ・授業的側面からのスタンス。授業実践を自ら実践するのではなく、授業実践を説明するスタンス。

- ・学問的側面からのスタンス。社会諸科学の内容を研究するのではなく、教育的意図を踏まえて社会諸科学の内容を構成するスタンス。

本書の「あとがき」においてこれらのスタンスは、社会科教育を含む教科教育学の科学研究を推進させる基準になり、これらを意識して研究に参与していくことが研究者としての使命であると記載している。その意味では、社会系教科教育授業実践の持続的研究を図る上で、研究者としての自己の研究方法の構築と社会的資質の自覚が覚知されたのである。

### ③ 『社会科授業実践に関する体系枠の構築と事例研究—知識獲得課程の視点に基づいて—』の研究的性格

本書は、平成5年に東京工業大学から博士（学術）の学位を授与された「知識獲得過程の視点に基づく社会事象に関する授業の分析」の学位論文（主査：坂元昂先生）を再構成したものである。本書の内容は、序章と終章に次の8章を加えて構成されている。

#### 序章

- 第Ⅰ章 社会科授業リソースに関するデータベースの開発
- 第Ⅱ章 知識獲得過程の視点に基づく社会科授業分析の方法
- 第Ⅲ章 知識獲得過程の視点に基づく社会科授業体系枠の構築
- 第Ⅳ章 知識獲得過程の視点に基づく社会科授業の事例分析
- 第Ⅴ章 知識獲得過程の改善を意図する社会科授業の事例開発
- 第Ⅵ章 知識獲得過程の改善を意図する社会科教授スキルの事例分析
- 第Ⅶ章 知識獲得過程の改善を意図する社会科教授メディアの事例分析
- 第Ⅷ章 知識獲得過程の改善を意図する社会科教授メディアの事例開発

#### 終章

このような本書の社会系教科教育研究の基軸は、授業実践のフロム（アリストテレスの思想）と授業実践のフォー（プラトンの思想）にあるが、前者が主になっている。本書の研究的性格は、次のように指摘される。

研究目的は、「教科教育学として社会科授業実践の規則性を解明し、それらの規則性を理論化することによって、社会科授業実践の体系化を図ること」にある。そして、本書の研究的性格が、「大海を試行錯誤的に航行する船に、現在の位置と目的に応じて航行を判断できる地図を作成すること」に喩えられている。さらに、研究方法の特色としては、恩師の森分孝治先生の研究方法与比較して次の事項を指摘している。

研究対象として授業実践のみに留まらず授業実践の核になる教材・教具も取り上げていること。科学的な社会認識形成を意図する探求方法があるべき社会科学学習指導論とするのではなく、児童・生徒の多様な学習能力に対応する包括的社会科学学習指導論の解明を意図していること。科学的な社会認識形成の理論から授業実践を開発することよりも多様な授業実践から帰納的に理論を構築していること。授業開発として学習指導案などの教授書だけでなく、学習を遂行できる教材・教具を開発していること。研究活動が個人的環境整備に留まらず社会的環境改善に参与していること。

研究活動プロセスを授業リソースの蓄積（第Ⅰ章）、授業リソースの分析と体系化（第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章）、授業リソースの活用化（第Ⅴ章、第Ⅵ章、第Ⅶ章、第Ⅷ章）として確立させていること。特に、授業リソースの蓄積として国立大学の附属小学校と附属中学校の公開研究会の社会科学学習指導案、『教育』『社会科教育』『地理歴史教育』『生活教育』『考える子ども』に掲載されている社会科授業に関する論文及び報告の情報をデータベース化したことは社会科授業の研究と実践を共有化する基盤構築として重要な役割を担うものとなっている。さらに、蓄積された社会科授業の知識獲得の内容と方法の特性を抽出し、体系づけたことは、日々実践されてきたどの授業も研究対象として価値があり、そのような授業の中に光り



輝く宝石の原石埋蔵場所を示す地図作成の役割も担っていると言える。その意味では、社会系教科教育授業実践の持続的研究を図る上で、日々の学校教育において実践されている授業には、柳宗悦が日用雑器に見いだした美的価値と同様に無限な文化的価値があり、その文化価値を発見し、創造していくことが求められる。さらに、そのような研究を推進していくためには、授業実践のデータベース化も含めて社会的基盤構築の仕掛けを具体化する必要がある。

本書については、伊東亮三先生から次のような書評をいただいた。「教科教育学の学的確立が叫ばれて久しく、われわれ社会科教育学の領域でも、学問的研究の成果に対して、いくつかの博士の称号が出されてきた。しかし、教科教育学研究の方法論野難しさから、提出されてきた博士論文の多くは、一般教育史研究をモデルとした社会科教育史研究であったり、外国教育研究にならった外国社会科研究であったが、この中村氏の博士論文（本書は、氏の博士論文を出版したものである）は、初めてわが国の社会科授業実践を対象とし、その実践の内容構成と展開過程を分析し、説明する体系的枠組みを構築しようとする、意欲的で社会科教育学上画期的な業績であることをまず指摘しておきたい。」<sup>3)</sup>

さらに、兵庫教育大学にて教育研究活動を共にさせていただいた星村平和先生から次のような書評をいただいた。「氏が学位論文作成に当たって指導を受けた坂元昂氏と大学院時代の恩師森分孝治氏との研究関心の違いについても述べられている。両氏の研究に依拠しつつも、それを超えて両氏の研究を発展させた意義は大きい。その意味で、文字通り、本書は氏の自立の書になっているのである。」<sup>4)</sup>

このような本書における研究の特色と意義を指摘できるのであるが、本書の原稿が完了した平成7年に阪神・淡路大震災（1月17日）とオウム教団の地下鉄サリン事件（3月20日）が発生したのである。これらの事件は戦後50年を経て形成されてきた日本の国家と国民としての体質の課題を吹き出させた歴史的事件であった。本書の「あとがき」にてこのことを次のように記載している。

「戦後50年、焼け跡から未来都市としての華やかな年づくりがなされてきた神戸であるが、数十秒間の地震によって都市の様相や機能が破壊され、6000余人を超える住民がなくなられたのである。そのような被害事実が生じた主要因は、住居・建物・道路・鉄道・公共施設・上下水道・電気・ガス・通信など住民生活を支える環境としての都市基盤の貧弱さにあったと考えられる。すなわち、戦後50年間に於ける神戸の都市づくりが住民の安全と福祉を保障できる質の高いものでなかったと言える。さらに、このような都市づくりの問題は神戸だけでなく、わが国における他の都市や町が抱えている共通の問題でもある。その意味では、わが国が経済的発展とともに、国際的には世界の先進国としての地位と役割を高めてきているのに、国内的には社会資本としての質の高い環境に恵まれた国民生活が保障されないというアンバランスな国家としての体質を伺い知れるのである。」<sup>5)</sup>

「このような阪神大震災によって混乱している国内状況に追い打ちを駆けたのがオウム教団による一連事件であった。そして、弁護士一家殺人、松本と東京地下鉄サリン事件などに直接関与し、国家転覆という教祖の唯我的陰謀に協力してきたのが、教団のエリート集団としての科学者たちであった。その事実は宗教心が場合によっては科学的精神も市民的倫理もまひさせるという恐ろしい精神性を生み出すことを示している。そのような精神性が生み出された主要因は、絶対者としての個人崇拜、基本的人権を無視した利己性、民主的社会の仕組みを無視した独裁社会などの前近代的精神性さえも批判し、超克できない民主的精神性の貧弱さにあると考えられる。すなわち、戦後、わが国は民主国家を宣言し、学校教育においては民主主義社会の維持と発展に寄与する人間形成を目的として教育が営まれてきたのであるが、その戦後教育は民主主義社会において個人として自立した人間形成を保障するものであったと言い難いのである。さらに、このような民主的精神の貧弱さの問題は、宗教集団だけでなくわが国における学校や職場を始め多くの社会集団において見られる共通の問題でもある。その意味では、民主国家としての制度的体制は整えられてきているのに、

その制度を活用し、発展させていく主体としての個人の民主的精神性の成熟がなされていない国民としての体質を伺い知れるのである。」<sup>6)</sup>

このような社会的事件から伺い知れる日本の国家と国民としての体質について鑑みると、民主的国家としての健全な発展と民主的国民意識の成熟が、わが国の根本課題である。そして、この国家的課題の改善を担うのが教育であると痛感された。その意味では、社会系教科教育授業実践の持続的研究を図る上で、社会的歴史的課題を背景に教科教育を含む教育研究の方途の再認識が今後の研究方法の新展開を生み出すように思える。

## (2) パネリストの発表内容

各パネリストが次の題目に関する内容を発表した。「大学院で学んだこと、活かしていること」(馬野氏)、「社会科授業実践開発の基盤の再点検、再構築—社会科教育学栄えて、社会科教育滅ぶにならないために—」(米田氏)「初等社会科授業研究の基盤構築に向けて—ウェビング法開発の経緯と課題」(關氏)。各発表内容については、別紙のようにまとめられているので、概要を述べる。

馬野氏の「大学院で学んだこと、活かしていること」の発表では、大学院時代に学習された授業実践のフロム(アリストテレス的思想)的性格の研究方法を踏まえて「総合的な学習の時間」のカリキュラム編成や教育実習での授業評価の手法に活用されている内容になっている。

米田氏の「社会科授業実践開発の基盤の再点検、再構築—社会科教育学栄えて、社会科教育滅ぶにならないために—」の発表では、社会科授業実践開発を図る授業構成理論の視点として、科学の研究成果の活用、授業実践の源流に関する歴史研究、学習指導方法としての「探究」理論の援用を指摘し、それらの視点に関連する修士論文の事例紹介の内容になっている。

關氏の「初等社会科授業研究の基盤構築に向けて—ウェビング法開発の経緯と課題」の発表では、パネルディスカッションの発表を踏まえて、ウェビング法を活用する「仮説推論的な学習方法の提案」と授業実践力形成を図る「授業評価スタンダードの開発」に関する内容になっている。

## 3 パネルディスカッションの意義と課題

本パネルディスカッションの趣旨は、これから本学会の中核を担われる新世代の研究者の方々に、社会系教科教育授業実践の持続的研究を推進させていく研究事例を提示していただき、授業実践研究の新視点と課題を検討することである。この趣旨を踏まえて、基調提案として中村が関与した3冊の編著をてがかりに社会系教科教育授業実践研究の性格とその研究基盤に関連する研究者としての資質および社会的研究体制の課題を指摘したのである。しかしながら、多くの学会でのシンポジウムやパネルディスカッションの論議内容が関連し、テーマに関する新知見を得ることは難しいのが実情である。

そこで、本パネルディスカッションのコーディネーターの特権によって基調提案と各パネラーの発表内容の意義と課題を指摘する。中村の基調提案では次のような社会系教科教育授業実践の持続的研究とその基盤構築に関する知見が開示されたのである。

- ①研究対象である現象としての授業実践は無限なる文化価値を有する。
- ②授業実践の文化価値を説明し、開発することが、研究方法の基本的性格である。
- ③研究方法は、先行研究や恩師の手法を継承するのではなく、研究課題に対峙して自己の研究方法を構築する。
- ④研究課題は、先行研究の研究成果および課題を踏まえると共に民主的国家としての健全な発展と民主的国民意識の成熟に関する社会的歴史的課題を視野に設定する。
- ⑤研究者の資質としてアイデンティティを保持するスタンスを自覚する。
- ⑥研究環境として個人研究のみならず社会研究体制の基盤改善を図る。

これらの社会系教科教育授業実践の持続的研究とその基盤構築に関する知見としては、①から④までが、研究的性格に関するものである。⑤は研究基盤としての研究者の資質に関するものであり、⑥は研究基盤としての研究環境に関するものである。このような知見との関連で、特に研究的性格から各パネラーの発表内容を検討すると次のこと

が指摘できる。

馬野氏の発表内容は、授業実践のフロム（アリストテレス的思想）的性格の研究方法を踏まえ、社会科以外の「総合的な学習の時間」のカリキュラム編成や教育実習での授業評価の手法に活用されている。その意味では、研究対象を異にする他の領域に授業実践研究の方法を転移させている研究として意義づけられる。しかしながら、社会系教科教育授業実践の研究自体として新視点を提示していないところに課題がある。

米田氏の発表内容は、授業実践のフォー（プラトンの思想）的性格の研究方法を踏まえ、「探究」理論の授業開発研究例を紹介している。その意味では、「探究」理論を推進している研究として意義づけられる。しかしながら、「探究」理論の授業開発研究については、氏の恩師である岩田一彦先生の門下生によって数多くの研究事例が輩出されている。「探究」理論の批判的再構成の新視点を提示しない限り、恩師の研究方法を継承しているに過ぎないところに課題がある。

関氏の発表内容は、授業実践のフォー（プラトンの思想）的性格の研究方法として、ウェッビング法の学習指導方法論を提案している。その意味では、子どもの主体的関与を生み出す学習指導方法論として授業実践研究の新視点を提示している研究として意義づけられる。しかしながら、ウェッビング法の学習指導方法論だけでは社会系教科教育授業実践の研究として内容論を欠如しているところに課題がある。本パネルディスカッションにて配付された資料ではネタ教材研究の成果も提示されているので、教材論とウェッビング法の学習指導方法論を関連づける新提案が必要である。

このような各パネラーの発表内容に関する意義と課題を検討すると、本パネルディスカッションの趣旨である社会系授業実践研究の新視点が提示された内容であると言い難いのである。今後、パネラーを含む本学会の会員諸氏は、前述した6事項の社会系教科教育授業実践の持続的研究とその基盤構築に関する知見を吟味され、本学会での研究的関与を期待する次第である。

なお、先に掲示したラファエロ作の「アテネの学堂」には古代ギリシャの哲人以外にラファエロ

自身も含めたダヴィンチやミケランジェロなどのルネサンス期の偉人たちも描かれているのである。その意味では、「アテネの学堂」には時間と空間を超えた西洋思想の百花繚乱の様相が描かれていると言える。学会組織の理念と運営も「アテネの学堂」をシンボルにし、持続的発展を祈念したい。

## 引用文献

- 1) 社会系教科教育学会編『社会系教科教育研究のアプローチ～授業実践のフロムとフォー～』学事出版社 平成22年2月 p.3
- 2) 森分孝治「書評中村哲著『社会科授業実践の規則性に関する研究―授業実践からの教育改革―』」全国社会科教育学会『社会科研究』No.41 1993年 p.98
- 3) 伊東亮三「書評『社会科授業実践に関する体系枠の構築と事例研究―知識獲得課程の視点に基づいて―』」社会系教科教育学会『社会系教科教育研究』第8号 1996年 p.85
- 4) 星村平和「書評『社会科授業実践に関する体系枠の構築と事例研究―知識獲得課程の視点に基づいて―』」全国社会科教育学会『社会科研究』No.45 1997年 p.74
- 5) 中村哲『社会科授業実践に関する体系枠の構築と事例研究―知識獲得課程の視点に基づいて―』風間書房 平成8年3月 p.674
- 6) 中村哲『社会科授業実践に関する体系枠の構築と事例研究―知識獲得課程の視点に基づいて―』風間書房 平成8年3月 p.675